

アロンに優る御子

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) <u>ユダヤ教の三本柱と 御子との比較</u>	テーマ	1:1~3	
	<u>天使たちに優る御子</u>	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	<u>モーセに優る御子</u>	3:1~6	
	第二の警告	3:7~4:13	警告②
	<u>アロンに優る御子</u> (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子) 注①	4:14~10:18	警告③ 5:11~6:20
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	生きた信仰の証明	11:1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■前回までの流れ

前回までに、第一区分の「テーマ」から「第二の警告」までを学びました。本日は「アロンに優る御子」(4:14~10:18)です。4章14節を読んでみましょう。

ここに「私たちの信仰の告白を堅く保とう」とありますように、ヘブル人への手紙が書かれた目的は、読み手であるユダヤ人信者たちに向けて、「イエスはメシアである」という信仰告白を保とう、と勧めることです。

この手紙が書かれた紀元64年から66年の頃は、ローマ帝国からの独立の機運が高まり、愛国主義的な同胞たちからユダヤ人信者たちが激しい迫害を受けていた時期でした。そこで信者たちの中には、迫害が沈静化するまで、いったんユダヤ教に戻ってエルサレム神殿の祭儀に参加しようという動きが出始めていました。

この動きに対して、著者は、一時的なつもりでもそのような妥協をしたら、エルサレム崩壊というイスラエル民族に対する神のさばきに巻き込まれ、身体の命を失うことになることを警告し、信仰告白を保とうと励ますのです。

著者は、この手紙のテーマを、御子がどれほどユダヤ教よりも優れているか、に置きます。そしてユダヤ教の三本柱は、天使、モーセ、アロンの3つですので、その3つと御子イエスとを比較しながら、警告と励ましを織り込んでいきます。

これまでに、御子は天使よりも、またモーセよりも優るお方であることがわかりました。本日は、いよいよ3つ目の比較「アロンに優る御子」です。

■「アロンに優る御子」(4:14～10:18)の構成

5つの対比	内容		箇所
より良い位置 (ポジション)	御子は天の聖所におられる(レビ系大祭司は地上の幕屋の至聖所に入ってまた出る、それも年一度、との対比)		4:14～16
より良い祭司	祭司の資格は、人であることと神から任命されること		5:1～4
	御子は人として苦難を通った。神は、御子をメルキゼデクに等しい大祭司として任命した。		5:5～10
	第三の警告	停滞している現状	5:11～14
		停滞を脱し、前進せよ	6:1～8
		救いと約束についての確信	6:9～20
	イエスの祭司職はレビ系ではなく、メルキゼデク型		7章
より良い契約	イエスは、より良い契約(新しい契約)の仲介者		8:1～6
	新しい契約の優位性		8:7～13
より良い聖所	地上の幕屋の備品		9:1～5
	そこでのレビ系祭司たちの奉仕		9:6～7
	地上の幕屋の限界性		9:8～10
より良い犠牲	メシアの犠牲は旧約の犠牲に優る		9:11～12
	メシアの犠牲がもたらした結果	信者の良心をきよめた	9:13～14
		新しい契約を成立させた	9:15～22
		天の聖所をきよめた	9:23～28
	メシアの犠牲がもつ効力	旧約の犠牲は不十分	10:1～4
		メシアの犠牲は十分	10:5～10
		レビ系祭司とメシアとを、今の働きという面で比較する	10:11～14
		新しい契約の効力	10:15～17
	結論：罪のための犠牲はもはや無用		10:18

□7章「イエスの祭司職はレビ系ではなくメルキゼデク型」(創14:17～20、詩篇110:4)

3つの対比と結論	内容		箇所
メルキゼデクとイエス	王と祭司を兼ねることなど、似ている		7:1～3
メルキゼデクの位とアロン(レビ族)の位	メルキゼデクの方が、アロン(レビ族)より上位である。		7:4～10
レビ系祭司職とイエスの祭司職	レビ系祭司職	世代で交替していく	7:11～14
		一時的である(律法とともに終わった)	7:15～19
	イエスの祭司職	不変であり、交替しない	7:20～22
		永続的である	7:23～25
結論	メシアこそ、私たちに必要な大祭司である		7:26～28

■「アロンに優る御子」(4:14~10:18)のアウトライン(清水私見)

1. 冒頭で述べられるのは、まず結論と中心的な適用(4:14~16)
 - (1) 結論・・・「私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられる」(4:14)
 - (2) 中心的な適用・・・「私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこう」(4:16)
2. 著者は、読者が提起するであろう質問を10問想定して、それに答えるような流れで、議論を展開していく。
 - (1) 前半の4問は、イエスの祭司職について(5:1~7:28)
 - (2) 前半が終わると、「以上述べたことの要点はこうです」。ここでいったん中間的なまとめをする(8:1~6)
 - ① 私たちの大祭司は、神の御座の右に着座された御方である。
 - ② 人間が設けたのではない、神が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる。それに対して、レビ系の祭司職は、天にあるものの写しと影とに仕えている。
 - ③ キリストは、(アロンの位よりも)さらにすぐれた務めを得られた。それは、キリストが、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるから。
 - (3) 後半の6問は、モーセの律法について(8:7~10:18)
3. 最後の第10問の答えの締めくくり10:18、「罪のためのささげ物はもはや無用です」。すなわち、読者のユダヤ人信者たちが当時考えていたこと＝エルサレムの神殿の祭儀に戻って動物の犠牲をささげる、ということは無用である、という宣言である。
4. この「アロンに優る御子」の教えをもって、第一区分は終わる。
 - (1) 第一区分では、御子が天使よりも、モーセよりも、またアロンよりも優る御方であるとわかった。このことを理解した上での適用が、次の第二区分。
 - (2) 第二区分は、次のことばで始まる。「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。」
 - ① これは、「アロンに優る御子」の冒頭で、語られた適用と対応している。
 - ② 「恵みの御座に近づく」と「まことの聖所に入る」とは、同じことを指す。
 - ③ ユダヤ教に戻ってエルサレムの神殿で動物の犠牲を捧げるのではなく、イエスをメシアと信じる信仰告白を保って天のまことの聖所に入ることが勧められている。信者の地位がこのようにはるかに高い、すぐれたものであることは驚くべきことである。

■想定される質問とその答え (清水私見)

	想定される質問	答え
1	イエスは、大祭司になることができますか？	5:1~10
	第2問に進む前に、読者の霊的受容力を整える 第三の警告と勧め	5:11~6:20
2	メルキゼデクに等しい大祭司とは何ですか？ の位	7:1~10
3	なぜ、レビ系とは別の大祭司が立てられるのですか？	7:11~25
4	では、キリストは天で犠牲を捧げているのですか？	7:26~28
	(中間的なまとめ)	8:1~6
5	「さらにすぐれた契約」とは何ですか。初めの契約（モーセの律法）には欠けがあったのですか？	8:7~13
6	初めの契約には、どのような欠けがあったのですか？	9:1~14
7	それでは、旧約の聖徒たちはどうなるのですか？	9:15~22
8	初めの契約において幕屋とその器具に犠牲の血が注がれました。同様にキリストは天の聖所にご自身の血を注いだのですか？ (参照、レビ 16:16)	9:23~28
9	モーセの律法は、まだ有効なのですか。それとも無効なのですか？	10:1~9
10	罪のためのささげ物は、必要ですか。それとも不必要ですか？	10:10~18